

2021年2月14日 礼拝説教要旨

詩編講解説教48「死を越えて」

詩編48：9～15、Iヨハネ1：1～4

第48編は、全体的に「都」という言葉が繰り返されます。また「城郭」「砦の塔」(4節)「神殿」(10節)「塔」(13節)「城壁」「城郭」(14節)このような具体的な建造物をイメージすることができます。これは言うまでもなくエルサレムの都であり、それゆえこの詩の背景にはバビロニア捕囚があるのではないかと言われます。つまりバビロニアによってエルサレムが陥落し神殿が焼き払われる。イスラエルはそういう経験の中で、ことさら都に対する憧れを強くしていきました。「その城郭に、砦の塔に、神は御自らを示される」(4節)とあります。都に神さまが臨在される。この信仰が帰還民たちによるエルサレム再建の大きな原動力になっていきました。あのエズラ、ネヘミヤの驚異的な神殿再建の物語を思い浮かべてくださってよいでしょう。神さまが臨在する場所を作ること。イスラエルにとってそれは心の拠り所となりました。たとえ国を追われ散らされたとしても、都に想いを馳せることでイスラエルはその神の民としてのアイデンティティを保つことができたのです。

もちろんキリスト者は、エルサレムを神の都として重んじているわけではありません。わたしたちはイエス・キリストがもたらしてくださった天の国、神さまの御国を帰るべき故郷、神の都として持つのであります。でもそれは単なる憧れとして頭の中で思い巡らしているだけの話ではありません。主の祈りで「御国を来らせ給え」と祈ります。この地上にも神さまの御国が届く。神さまの都が現れる。この熊本もまた「御国を来らせ給え」と祈る群れがあるところ、そこに神さまが臨在する。神の都となるのです。主イエスは「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイ18：20)と言われます。それが他でもない教会であります。更に言えば、教会の中心となるこの礼拝こそ、天上から地上へと届く神さまが臨在する神の都を現している、そう言うことができるのです。そう考えますと、第48編は今日のわたしたちの礼拝に適用して読むことができると言えるでしょう。

「聞いていたことをそのまま、わたしたちは見た。万軍の主の都、わたしたちの神の都で」(9節) この「聞いていたこと」というのは神さまの救いの御業のことです。イスラエルの人々は出エジプトの出来事などを親から子へ伝え聞いてきました。その伝え聞いていた救いの話が、ただ物語として聞くだけではなく、ここでは「見た」と言います。そこに現実のこととして起こる。そこで追体験するということです。今日はIヨハネ1：1～4を読みました。「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について」(1節) この「命の言」はイエス・キリストのことを指しておりますが、礼拝というのは、実際にキリストに出会い、その救いを見て、触れる。そのようにして救いが自分の出来事になる場所です。

そのことに関連して10節に「神よ、神殿にあってわたしたちは、あなたの慈しみを思い描く」とあります。「思い描く」というのは、ある翻訳では「再演する」演じるというように訳しています。イスラエルの礼拝において劇のようなことがあったのかもしれませんが。ただ頭の中で思い巡らすということよりも、実際に演じられるということ。そのようにして救いを見て、体験する。これは興味深いことです。今年のクリスマス礼拝で教会学校の子どもの朗読劇をいたしました。いつもは礼拝後の愛餐会でやっていたことですが、コロナで愛餐会が中止になり

礼拝の中で行うことになった。そうしたらこれが非常に良かったのです。それこそ怪我の功名というものです。御言葉が演じられることでその情景を思い描くことができる。イメージすることができる。それがまさに「見る」という体験です。

今週から受難節（レント）が始まります。私ごとで恐縮ですが、毎年、この時期になりますと、わたしは受難曲を聴くようにしています。バッハのマタイ受難曲、ヨハネ受難曲を繰り返し聴きます。先日、何気なく受難曲のコンサートを配信していないかと思って探しておりましたら、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団のコンサートがありまして、偶然それを観て衝撃を受けました。それは一つの音楽劇のようになっていたのです。その会場全体をステージにして、聖歌隊もソリストも皆で受難劇を演じます。特にエヴァンジェリスト（福音書記者）の役が大役なのですが、福音書の御言葉を演じながら歌っていきます。その人はキリストの苦しみを表現しているうちに感極まって涙を流します。わたしもつられてつい泣いてしまった。完全にその世界に入ってしまった。

わたしたちの礼拝も本来そういうものなのです。その世界に入ってしまう。キリストの苦しみを体験し涙する。そのようにして、ここは神の都だと感じられる、そういう礼拝をまもらなくてはならない。特にこのコロナ禍にあって、礼拝を短縮したり、聖餐を停止したり、そのことで礼拝の質がどうなったのか。そのことを反省しなければなりません。多くの教会が聖餐に与れないでおります。これは深刻な事態です。改革者たちは聖餐を見る神の言葉と言いました。カルヴァンはなぜ聖餐に与るのかという問いに対して、わたしたちの弱さを緩和するためだと答えます。実際に見て、手に取って触れることで救いを追体験し、弱った信仰が強められるのです。その体験がどうしても必要なのです。そしてそれゆえに「後の代に語り伝えよ」（14節）と言われます。救いを体験したものはこの救いの御業を語り伝えるというステップへ進みます。

神さまの救いは絵に描いた餅ではありません。そこには実体が伴うのです。それゆえにイエス・キリストは真の人となられ、わたしたちのところに来てくださいました。そこには実体があります。だからヨハネは言うのです。「わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたもの」と。それを体験するのがこの礼拝です。聖霊の助けにより、ここで福音が語られ、聖餐に与る時に、ここはまさにキリストが共におられる場所、神の都になります。しかもそれはここだけで完結している話ではありません。この地上から天上へと続く神の都がここにあります。キリストは復活し天に昇られて、御国への道を開いてくださいました。この神の都、天の御国へ死を越えて神さまはわたしたちを導いてくださるのです。わたしたちは地上にいながら御国に想いを馳せることができます。わたしたちはそういう礼拝を目指しています。